【三番目物 幽玄の世界】

静寂の中で揺らぐ炎 幽玄の世界へ誘う「薪能」

登米謡曲会が森舞台で毎年９月に開催しているのが「登米薪能」です。神事として演能し、登米神社に奉納されています。新型コロナウイルス感染症の影響で４年ぶりに開催された昨年は大入満員。今年も会場は観客で埋めつくされました。

登米能のように、アマチュアだけで演じられる能は宮城県で唯一。東北地方でも登米能のほかには山形県鶴岡市に伝わる黒川能など、わずかしかありません。そんな貴重な能を一目見ようと、市内外から多くの人が訪れます。

登米薪能は、登米神社で受け取った神火を薪に点火し、会場が幻想的な雰囲気に包まれる中で開演。舞台上に何もない状態で始まり、何も残さずに始まる前と同じ状態で終わりを迎えます。全ての演目が終わった後の静まり返った舞台を見ていると、それまでの出来事が幻だったかのような感覚に。それはまるで、幽玄の世界と現実を行き来する時空を超えた幻想の旅に行ってきたかのようで、今もなお人々の心を魅了しています。

1本番当日、大内五郎右衛門の記念碑に祈りを捧げる米谷会長 2登米神社で火入れの儀を行い火種を受け取る 3観客で埋めつくされた森舞台 4式三番で薪能の幕が上がる 5 3人が仕舞を披露 6狂言は、詐欺師にだまされる物語「末廣かり」が演じられ、会場からは笑い声が

7今年の能の演目は「羽衣」。漁師が松の枝にかかった羽衣を見つけ、その美しさに家宝にしようと持ち帰ろうとする 8羽衣がないと天に帰れないので返してほしいと懇願する天女。涙を流す姿を見て漁師は羽衣を渡す 9羽衣を返してもらう代わりに美しい天上界の舞を披露する

薪能の世界を演じる役者たち

さまざまな役割の人たちによって演じられる能。それぞれの役割を紹介します。

～ 仕舞 ～

高橋 尚さん（登米町我津郷）

仕舞は、能の演目の見どころ部分を面や装束を身に着けずに、紋服やはかまで演じるもので、基本的には地謡に合わせて舞います。一つ一つの所作を丁寧に舞うことを心がけています。

～ 狂言 ～

佐藤 勝彦さん（迫町本田）

狂言は、演者自身にせりふがあり、会話を中心に日常の面白い出来事を演じる喜劇です。聞き取りやすいように発音することと、声の強弱や表情で感情を表現するように工夫しています。

～ 地謡 ～

太郎丸 晃さん（登米町金谷）

地謡の役割は、演目の物語や風景描写、心情を謡で表現することです。囃子と共に、能の世界をつくりあげる重要な役割なので、演目やその場面の情景に応じた表現をすることが求められます。

～ 囃子 ～

布施 紀江子さん（迫町一市）

囃子は、笛、小鼓、大鼓、太鼓で構成されていて、打楽器の奏者は演奏しながらかけ声もかけます。楽器と声で登場人物の感情を表現するので、見ている人に伝わるように心がけて演奏しています。

～ シテ ～

佐々木 仁さん（登米町入谷）

シテは能において主役を担う演者のことです。演目によって、人や神、霊、鬼などに扮し、唯一顔に面をつけることができます。表現力が求められるので、演じる前に鏡の前で集中力を高めています。